



「伝統文化の継承」

川俣町と運命の出会い

高校時代の私には、「地方で働く」という選択肢はありませんでした。そのため、高校卒業後は、地元東京のイベント会社に就職しました。イベント会社に就職したのは、学生時代にやっていたダンスをとおり、一つのことを協力して作り上げることに「やりがい」と「楽しさ」を感じ、イベントをとおり、これらのやりがいと楽しさを感じたいと思ったからです。

しかし、約2年間働いていたある時に、「東京以外の景色が見てみたい!」と思うようになり、地方で何かできることがないか考えるようになりました。その時に知ったのが「ふるさとワーキングホリデー」という事業です。

地方で一定期間の休暇を過ごすと共に、期間中はその地域で働きながら滞在費を補うという制度です。私は、この制度を活用し、福島県猪苗代町で2週間の地方暮らしを体験しました。川俣町の存在はこの時に、猪苗代町の地域おこし協力隊の方から聞き、同時に地域おこし協力隊という存在も知りました。

その後、東京に戻り川俣町のことを調べると、自然豊かで養蚕などが栄えていることを知り、川俣町で働いてみたいと思い、地域おこし協力隊に応募しました。

住んでわかった

「都市部」と「地方」の違い

私が川俣町に住んで最初に感じたのが、気候についてです。東北地方は涼しい印象を持っていましたが、実際に生活してみると、むしろ暑いことを知りました。

また、生活をしていて感じたことが、温かい人が多いということです。スーパーなどに買い物に行くと、店員さんが話しかけてきてくれたり、気さくな方が多い印象を受けました。また、話しているときになまりがあったり、イントネーションが違うことも知りました。

都市部に比べ、電車はなくバスの本数は少ないですが、今のところ、生活をしていて困っていることは特にありません。むしろ、夜になると空に無数の星空が広がっていたり、川や山などの自然も豊かで、楽しく生活を送っています。

休日には、自転車で川俣町内を散策したりしています。まだまだ町内の地名を覚えられていませんが、自転車で川俣町の町並みを見ながら勉強していこうと思います。新しい土地の町並みを見てみると、自分の土地とは違うところがたくさん見つかり、ワクワクしながら自転車を漕いでいます。

今後も、普段の生活や仕事をとおり、伝統や歴史を学びながら、川俣町のことを知っていききたいと思っています。



「伝統文化の継承」 生まれてはじめて織物体験

洋服販売店で務めていたときに、洋服の生地の種類や生地の特性を学んでいたため、何かこの経験が活かせないかと思う、「伝統文化の継承」の活動を選択しました。

織物は、生まれてはじめて体験しました。織物をはじめる前は、深く考えることもせず、正直簡単だと思っていました。しかし、実際に織物を体験してみると、機織機の使い方もわからず、力加減なども難しく、とても奥が深く難しいものでした。機織機で織物を始めるまでも、たくさん準備工程があることも知りました。

「伝統文化の継承」の選択活動では、伝統の織物や草木染めの技術を習得し、体験教室の指導員として活動することを目指します。現在、からりこ館で指導している先輩方からたくさんの技術を教わり、まずは、織物と草木染めを習得し、立派な指導員になりたいと思います。

また、イベント会社や洋服販売店での勤務経験を活かし、からりこ館や織物展示館、道の駅全体をより多くの人に知ってもらい、より一層盛り上げていけるように活動していきたいと思います。第1号の地域おこし協力隊としても、後々加入する隊員の見本になるような活動を行い、川俣町のために頑張っていきたいと思っています。

この場所に新たな風を吹き込んでほしい。

平成30年5月から、夢実さんが地域おこし協力隊としてからりこ館にやってきました。右も左もわからない状況だとは思いますが、伝統の織物・草木染めの技術をはじめ、町の特産品についてや産業について一生懸命に学び頑張っています。今は、現在やっている業務を一通り覚えてもらい、体験していく中で外から来た新たな視点を活かし業務を広げていって

ほしいです。夢実さんには、町で興味の湧いたものにはどんどん積極的に参加してほしいと思っています。また、故郷の東京に帰った際にも、新たな発見があると思いますので、それを持ち帰ってきて業務に活かして欲しいです。

外から来た視点と若い世代の視点を活かし、からりこ館と道の駅に新たな風を吹き込んでほしいと思います。



かわまたおりもの展示館
藤原和一さん